

「クリスマスの起源」

0・クルマン著書より

第一部 クリスマスの起源

- ・紀元後三世紀までのキリスト教徒は、12月25日をクリスマスとして祝っていなかった。
- ・ローマ帝国では12月25日は太陽崇拝の特別な祝祭日であった。

1. イエスの誕生日

- ・1月6日説…かつて最も広く受け入れられていた説。4月6日をイエスの受胎、また死の日とし、そこから9か月後であるこの日を誕生日と考えた。
- ・3月28日説…ローマ暦（ユリウス暦）と創世記の天地創造の第4日、太陽が創られた日による解釈。
- ・春説…世界は春に始まったという解釈。4月2日、4月29日、5月20日など様々な説がある。

イエスの誕生日についての様々な説がとねえられても、それらが重要視されることはなく、逆に嘲笑の対象となっていた。

2. 1月6日の祝祭

- ・教会は、キリスト降誕を祝う必要性を特に感じていなかった。
- ・死と復活こそが受肉よりもはるかに重要であると考え、主の日（日曜日）とイースター（復活祭）を重要視した。
- ・1月6日は、アレクサンドリアの神アイオンの誕生日であったため、キリストこそが神であることを訴えるために、この日をイエスの誕生日、および受洗日とした。
- ・実際に1月6日にイエスが生まれたかどうかということについては問題視されなかった。

3. 12月25日の祝祭

- ・A.D325～354年のローマにおいて、コンスタンティヌス（306～337）の統治下で行われた。
- ・太陽神（ミトラス教）を祭る特別な日であった。
- ・マラキ書4:2「義の太陽がのぼる」から「キリストは私たちの新しい太陽である」とした。
- ・コンスタンティヌスは宗教混淆主義によって民族統一を図ろうとした。

4. 12月25日の祝祭の普及

- ・東方教会はこれに反発した。しかし説教者クリュソストモスの尽力によって普及した。彼は複雑な計算を用い、事実としてキリストは12月25日に生まれたと説いた。
- ・しかし現在も1月6日に降誕を祝う教会、教派は世界に数多く存在する。またアルメニア正教会では1月8日、19日に降誕を祝う。

5. 歴史的、神学的結論

- ・キリスト教徒は今も昔も、歴史的根拠の確かな日にキリストの誕生を祝ってはいない。
- ・キリストの誕生を祝う動機は、救済の事実、神が人となり降臨されたという事実のもつ神学的意味に関する、キリスト教的考察に由来する。
- ・誕生日を祝うという文化、風習はもともと異教的なものである。これをキリスト教に取り入れ、私たちはキリストの受肉を祝う特定の祭りを祝うべきなのか否か。
- ・しかしキリスト降誕についての預言があり、マタイ、ルカ、ヨハネがその事実を取りあげて記している。
- ・太陽神の祭はキリストによって滅ぼされたという解釈。

第二部 クリスマスツリーの起源

- ・現在のような形式（モミの木にりんごのような赤い飾り）は、およそ400年前から始まったとされる。
- ・エデンの園の善悪の知識の木、またいのちの木を表し、人の罪を思い起こさせ、その罪を取り除くために来られたキリスト、そして永遠のいのちを与えるキリストを指し示すとした。
- ・中世に、新年祭、冬至の祭、サンタクロースのモデルとなった聖ニコラウス祭（12月6日）では若木や枝や樹木を立てて祝う習慣があった。
- ・モミの木は常緑樹で永遠、不変を連想させる。
- ・14世紀では聖餐式のパンも飾りつけられていた。これがクッキーやお菓子に変化していった。
- ・十字架の木という結びつき。
- ・聖書のメッセージへとつなげていく必要がある。

(要約)

神田 満